

除菌液噴霧器の販売を強化

衛生機器製造などの星光技研(長野市)は、除菌や消臭効果があがる液体専用の噴霧器の販売を強化している。頭打ちとなった既存事業の技術を生かして7年前に開発した噴霧器は、衛生管理に気を使う病院や高齢者施設などで需要が伸びて主力事業に成長。今秋、大広間向けの新機種を発売し、各種ウィルスの空気感染が懸念される冬場に拡販を図る。

星光技研



除菌や消臭効果のある「次亜塩素酸水」専用噴霧器の新機種。約120畳の広さに対応する

同社の噴霧器で使う液体は、インフルエンザやノロウィルスの除菌対策などに使われる「次亜塩素酸水」。市販品では手で噴射するスプレータイプが普及している。

同社が発売した新機種「KS-3000」は、約120畳の大広間に対応。本体の容器内に入れた液体が、容器の底にある振動子の超音波振動で霧状になり、三つの噴射口から放出される。連続運転で毎時1・6立方分の霧を自動生成。市場価格は40万〜50万円ほど。

星光技研は1973(昭和48)年設立。北信地方のキノコ農家向けに、生育室を高湿度に保つための湿度調整器などの製造を手掛けてきた。売上高の7割をキノコの生産管理機器が占めた時期もあったが、各農家が生産効率を上げようと工程の一部を外部施設に委託し始めると受注

が減少。新規事業を模索していた。

噴霧器の製造は2006年に開始。これまでの加湿技術の高さを見込まれて栃木県の衛生機器製造業者から「次亜塩素酸水を霧にする装置を作れないか」と打診があったのがきっかけだった。

液体は塩素系のため、湿度調整器と同様の方法で作った製品は内部の金属部品がさびて耐久性が弱かったことから、腐食対策をした部品を使うなどして改良。一定空間を自動で除菌・消臭できる自新しさや手軽さが受け、ラインアップを大小4機種に増やし、売上高の8割強を占める事業となった。

同社の14年3月期の売上高目標は、新機種の投入効果を見込んで前期比43%増の1億5千万円。坂本真一社長は「当社製は国内で高いシェアがある。大勢の人が集まる娯楽施設などにも普及させたい」としている。